



## 主体的・対話的で深い学びを目指した「漁父之利」の授業実践：蘇代のたとえ話の巧みさに着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学大学釧路校国語科教育研究室 公開日: 2021-03-30 キーワード: 作成者: 山本, 悟史, 泥谷, 春佳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008885">https://doi.org/10.32150/00008885</a>

## 主体的・対話的で深い学びを目指した「漁父之利」の授業実践

—蘇代のたとえ話の巧みさに着目して—

山本 悟史

泥谷 春佳

### 一、はじめに

「漁父之利」は、人口に膾炙している故事成語であり、難しい句形も使われていないため、漢文入門期の教材として多くの教科書に採録されている。

教科書においては、寓話部分のみを取り上げ、背景となる歴史的状况については前書きで示しているものと、「趙且伐燕。」という歴史的背景から取り上げているものの二つに大別できるが、学習課題は各社とも共通しており、『蚌』『鷸』『漁者』は、それぞれ何のたとえとなっているか、『漁父之利』は、現在どのような意味で使われているかという二点に集約される。

「漁父之利」は、中学校の教科書でも故事成語として紹介されているため、後者の学習課題は学習者にはやや新鮮味に欠けるであろう。渡邊(二〇〇一)が「故事成語の背景の部分に寓話以上の面白さがあることを忘れてはならない」と述べているように、高等学校における漢文の学習では、歴史的背景も踏まえながら蘇代のたとえ話の巧みさに迫っていく前者の学習課題が重要であると考える。

しかし、果たして学習者は、このたとえ話をどれほど緊迫感をもつて理解できているだろうか。三省堂の教科書「明解国語総合」には「故事成語と遊説家」と題して、次のようなコラムが掲載されている。

「隣国に行つて、わが国への攻撃をやめるよう説得せよ。」  
国王からこんな難しい要求をされたらどうすればよいだろうか。戦国時代、そんな大役を引き受け、決然と敵地に乗り込み、巧みな話術によつて相手を説得する人々がいた。彼らは、もし失敗すれば、敵国の王から殺されるおそれがあるだけでなく、自国の王から罰せられることもあるため、命がけて任務を遂行した。己の弁舌だけを頼りにした彼らのことを「遊説家」と呼ぶ。『戦国策』には、遊説家の残した逸話が多数収められている。

この補足説明は「漁父之利」を理解する上で必要不可欠であろう。自国の王に対して「隣国の隙を突いて攻撃した方がよいですよ」と説得する場合と、今まさに自国を攻めようとしている敵国に対して「本国への攻撃は得策ではないのでやめた方がよいですよ」と説得する場合とは、その任務の難易度は全く異なってくる。蘇代は決して思いつきで「蚌」「鷸」「漁者」を引き合いに出したわけではない。考へ抜いた末に、自らの命を賭してこのたとえ話を切り出したのである。緊迫した状況において提示され、見事に成功したたとえ話であるからこそ、「漁父之利」は一層、痛快なものとなる。しかしながら、使用している教科書にはこのような説明はなく、また、指導書や市

販の参考書も、動物を用いた寓話の面白さに力点が置かれており、こうした緊迫感や痛快さが伝わりにくい。これでは「漁父之利」の魅力が半減してしまうのではないだろうか。

本稿では、「漁父之利」を教材として、「蘇代のたとえ話の巧みさ」はどのような点か」という学習課題を設定し、主体的・対話的で深い学びを目指した授業実践の成果について取り上げてみたい。

## 二、蘇代のたとえ話の巧みさ

一般的にたとえ話には、話をわかりやすくし、説得力を高める効果がある。しかし、伝えたいことを何にたとえ、どのように表現するかという話者の創意工夫によって、その効果は大きく変わってくる。

高芝(二〇一七)は、蘇代のたとえ話の巧みさとして、『ここに至る途上で偶然見かけた』という体で語り始めることを挙げている。確かに今から攻撃しようとする敵国から使者が訪問しているとなれば、相手は警戒するのが当然であろう。最初から身構えられてしまうと、蘇代は話を最後まで聞いてもらえない可能性が高い。その点、「ちようどこちらに来る途中で、シギとドブガイを見ましてな……」というように、何気ない雑談から話しはじめ、一気に交渉の核心へと話を展開していく蘇代の話術は見事であり、現代にも通じる説得技術の一つであると言える。

また、高芝は「動物を擬人化し直接話法を用いる例え話は、いずれも紀元前四世紀半ば以前にはさかのぼれない」とし、その使用例も少ないことから、当時「斬新で画期的な技巧であった可能性が高い」と述べている。目新しく、魅力的なたとえ話を持ち出すことによつて、趙の恵王の興味関心を惹こうとした蘇代の工夫を見て取るこ

とができるよう。

さて、ここで着目したのは、鶻と蛙のセリフに込められた燕の国の気概、不退転の覚悟である。鶻と蛙のセリフは、一見、ユーモラスな意地の張り合いのように見える。しかし、「今日不レ雨、明日不レ雨、即有ニ死蛙。」という鶻の恐喝に対して、「今日不レ出、明日不レ出、即有ニ死鶻。」と蛙が応酬することは、「我々は簡単に屈しはしないのだ」という燕の強い決意とプライドを表している。戦争を仕掛ける側としては、早い段階で敵を降伏させ、自国の損害を最小限に抑えたいのだが、「両者不レ肯ニ相舎。」というように、敵が最後の一兵卒まで徹底的に抗戦してくる場合は、戦争が長期化することを覚悟しなければならない。しかし、趙の背後には、秦という大国が控えている。こうした前提があるからこそ、「漁者得而并ニ擒之。」という一文がより説得力を増して迫ってくるのである。

ただし、脅しともとれるような発言は、趙の恵王の逆鱗に触れる可能性もある。したがって、趙に対しては十分に敬意を払い、自国については卑下する必要がある。その点、例えられた鶻と蛙は、見た目の美しさや一般的な強さ関係、捕食者と被捕食者の関係において、趙の恵王も満足できるものであったと言える。「平凡な親から賢い子が生まれる」ということを表す「老蚌、珠を生ず」という言葉があるが、これは「建安の七子」の一人である孔融が友人の夷端にあてた手紙の文面に見られるもので、当時の中国における「蚌」は、自らを謙る言葉として相応しいものであったことがわかる。また、例えられるものは、国王という立場でもイメージできる身近な対象物でなければならぬが、おそらく鶻と蛙は当時、食用として国王にとっても馴染みのあるものだったのではないだろうか。というのも、漁者が鶻と蛙を捕らえる場面が描かれているからである。捕らえる目的

は食用に他ならない。

授業では、学習者から「貝の殻は固いので、簡単に燕は攻め落とせない」ということを表しているのだと思う」という意見や「鷸は攻撃側、蚌は防御側をよく表している」という意見が出された。授業者の想定を超える優れた意見であり、他のクラスでは「この意見も紹介したい。ちなみに、鷸の字には「矛」という文字が含まれており、実際のシギの嘴も矛のように鋭い形状をしている。攻撃側の象徴として相応しいイメージである」と言えよう。

このように蘇代のたとえ話の巧みさは、一つひとつの語句の使い方や表現の仕方を吟味することで明確に浮かび上がってくる。したがって、この学習課題は、言葉によるもの見方、感じ方を働かせて考える必要があり、深い学びにつながっていくと考えられる。

### 三、「漁父之利」の授業の実際

現在、一年生の国語総合は山本と泥谷の二人で担当しており、単元に入る前に目標や授業展開について協議を行っている。協議の結果、本単元の目標は、「文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読む」「国語総合」C読むこと(1)ア、「漢文における訓読のきまりを理解する」「国語総合」伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項アのイ」とし、全三時間で構成した。

本単元は漢文に入ってから段階であり、初めて触れる漢文の文章でもあるため、第一時は「漁父之利」の音読と書き下し文の作成に十分な時間を取ることにした。第二時は内容を確認し、『鷸』『蚌』『鷸』『漁者』は、それぞれ何のたとえとなっているかという学習課題に取り組ませた。句形は難しくないので、パワーポイントを用いながら内容を捉えさせることに重点を置き、精読はなるべく避けた。第三時は、蘇代に与えられたミッションの重大さと難しさを確認させた上で、「蘇代のたとえ話の巧みさはどのような点か」という学習

課題について、個人、グループで取り組ませた。その際、ジグソー活動を参考にして、三種類のヒントカードを準備し、議論が行き詰まった頃合いを見て、グループごとに別々のヒントカードを配布した。その後、ホワイトボードに話し合った内容をまとめさせ、教室全体で各グループの考えを共有した。ちなみに、準備したヒントカードは、次のア〜ウの通りである。

ア 「今者臣来」と話し始めることには、どのような効果があるだろうか。

イ 鷸と蚌のセリフは必要なのだろうか。セリフがあることで、どのような効果が生まれているだろうか。

ウ なぜ「鷸」「蚌」の例えなのだろうか。「猫」や「犬」ではダメなのだろうか。

ヒントカードは補助発問として、主体的・対話的で深い学びを推進するためのパワーブースターとしての役割を持つ。グループごとに与える内容を変えたのは、一つの問いに絞って考えさせることで授業展開を速くし、「一時間の授業の中でまとめ、振り返り」まで収めようと考えたためである。漢文を学習し始めたばかりの学習者にとって、テキストの言語抵抗はまだ大きい。生徒の興味関心を持続させるためには、授業が間延びしないようにする必要があると考え、このように設定した。

授業の最後は、「あなたの周りに、まったく自分の考えを変えようとしていない人がいた場合、あなたはどのようにして説得するか」という学習課題を宿題として課した。この学習課題によって、蘇代の説得技術を参考にしながら、学習者が実生活に関連付けて考えることができたかどうかを確認することにした。

#### 四、学習課題に対する学習者の考え

第三時の授業では、蘇代のたとえ話の巧みさとして、各グループから次のような意見が出された。

- ① 鵠と蚌という想像しやすいいものに、争っている二国の状況や、そこからどういうことになるのか、想定されることを当てはめることで、理解させやすくして、説得を容易にさせている点。
- ② 例え話を用いることによって、相手のプライドを刺激せず、自国へ攻め込まれるのを防ぐとした点。
- ③ 話を相手の意見の全否定から入るのではなく、例えを使い、遠回しに立場が不利になることを伝えているところ。
- ④ 「今者臣来」と始まる事から、この身近な所でも起こっている事を具体例にする事で、説得力や危機感をもたせようと思ったから。
- ⑤ 物語のように例えて話せば、恵王がきいてくれると思つたから。
- ⑥ たとえ話にセリフを入れ、よりわかりやすくおもしろくして、照王と恵王に殺されるのをまぬがれようとした点。
- ⑦ 鵠と蚌のセリフがあることで、物語性があり、その立場になつて感情移入しやすくなる。
- ⑧ 自分の国を蚌とし、相手の国を自分よりも強い鵠として表すことによつて、相手をおだてて、相手の気を悪くさせないようになっている。
- ⑨ 固い貝(攻撃など手が出せない)………簡単には落ちない。
- ⑩ 趙の国の戦力の強さを強調しつつ、自国も十分に戦えることと、いざとなれば攻撃できることを表している。

文末表現が、「く点」、「くから」などと揺れているのは、学習課題は「どのような点か」であったのに対し、ヒントカードは疑問文で書か

れていたためであろう。

一般的なたとえ話の効果に対する意見は①～③、ヒントカードのAに関連する意見は④、Iに関連する意見は⑤～⑦、Uに関連する意見は⑧～⑩に分類できる。学習者の話し合いの過程を観察してみると、最初の段階では、「たとえ話を用いるとわかりやすくなる」などの一般的な効果(①～③)への指摘に留まっていたが、ヒントカードを示すことにより、多くのグループが蘇代の表現に即したとえ話の効果(④～⑩)へと思考が広がっていったことが見て取れた。しかし、ヒントカードを提示した後も、「鵠と蚌のセリフを入れることで争っている状況がわかりやすくなる」、「蘇代が趙に説得したいことを、貝と鳥が争っているのを見て、今の自分たちに似ていませんか、ということ伝えてみようとした」など、一般的なたとえ話の効果に終始するグループも見られた。机間指導の際には、学習状況に応じてさらなる補助発問を準備しておく必要があると思われる。ちなみに、学習者にとつては、話題の導入におけるレトリック(ヒントカードのAの項目)が、最も難しく感じられたようだ。

対話的な学びにおける留意点であるが、「蚌」の「燕の国」、「鵠」の「趙の国」、「漁者」の「秦の国」というように、例えられているものが何かについて個人で理解できていないと、「蘇代のたとえ話の巧みさ」についてグループで議論することができないことが明らかになった。前時の振り返りにおいて、その確認が十分でないまま議論をさせたクラスについては、議論の最初に学習者同士でその確認作業を始めてしまいい、議論が深まるまでに時間がかかってしまった。また、個人で学習課題に取り組ませないままグループワークに入ってしまったクラスについては、個人の理解の変容を十分に見取ることができなかった。言語活動においては、まず個人で考えさせた後にグループで協議させ、再び個人で考えさせることが重要であろう。ただし、その分時間がかかるため、タイムマネジメントに気を配る必要がある。

宿題として課した「あなたの周りに、まったく自分の考えを変えようと思わない人がいた場合、あなたはそのようにして説得するか」という学習課題については、次のような記述が見られた。

- ・蘇代を見習って、まずは簡単な世間話をし、その中でうまいたとえ話をもち出すことができれば良いと思います。そのたとえ話の中でも、相手の意見を否定することがないよう、遠まわしにやわらかく自分の主張を伝えたいと思います。
- ・相手の興味がありそうな話から文脈をつないで警戒心を解く。相手の意見を尊重しつつ、自分の主張をわかりやすくして、客観的に状況を把握しやすいように説得する。
- ・まず話を聞いてもらわないことには交渉が成り立たないから、相手を強い立場に例えて、自分を弱く話をすすめる。そうしたら次第に相手の機嫌もよくなつて交渉が成立すると思う。自分と相手の立場をきちんと理解して話を進める。

ほとんどの学習者が、自分の主張を相手に聞いてもらうためにどうすればよいかについて言及していた。話題の導入におけるレトリックは、最初の読みの段階で学習者の発想にはなかつただけに、印象に残ったようだ。

## 五、おわりに

本実践では、蘇代が命を賭して用いたたとえ話であるという歴史的背景を踏まえることで、生徒の興味関心を喚起し、主体的な学びを促すことができた。また、「蘇代のたとえ話の巧みさは何のようなかか」という学習課題を設定し、グループで考えさせることにより、対話的で深い学びに迫ることができた。この学習課題に取り組むためには一つひとつの語句の使い方や表現の仕方に着目しなければ

ならない。これは新学習指導要領における「言葉によるものの見方、感じ方」を働かせることに他ならない。また、この学習課題は漢文の授業だけに留まらず、レトリックの効果について考えさせる学習へとつなげていくことも可能である。

漢文教材については、参考となる資料や実践事例が十分ではないと感じることが多い。他の故事成語や定番教材である「史記」についても、主体的・対話的で深い学びにつなげていくためにどのような学習課題や授業展開が考えられるか、多くの実践事例が提案されることが期待される。

## 引用・参考文献

- 荒木美智雄「故事成語が孕む『論理性』を読み解く―先ず隗より始めよ―での真の勝利者は誰？」『漢文教室』第一九九号 大修館書店
- 高芝麻子(二〇一七)『漁夫の利』の動物たちはなぜしゃべるのか―『戦国策』に見える擬人法』(横浜国立大学教育学部紀要 古典教育デザイン 第三号)
- 三省堂(二〇一七)『明解国語総合』
- 八重樫一「今日の四字熟語・故事成語」(青空発WEB新聞「福島のNEWS」No.2119 <http://fukushima-net.com/sites/meigen/2476/>)
- 渡邊雅之(二〇〇一)「故事成語の背景」『国語教室』第七二号 大修館書店
- 渡邊雅之(二〇一三)「高等学校における漢文指導」『漢文教室』第一九九号 大修館書店

(やまもとさとし)／大分県立竹田高等学校  
(ひじやはるか)／大分県立竹田高等学校